

草壁塾開講！

三月九日(木) スタート
毎月第二木曜 一〜五時
於・文京シビックセンター(東京)

新・カリキュラム

- | | | | | | |
|------|--------------------------|-------|------------------------------|-------|----------------------------|
| 第一回 | 現代に詩を書く意義 | 第二十一回 | 漱石の正直 文学は人の問いに応えるもの | 第四十九回 | 仮名文学始まる(菅原道真の文化政策) |
| 第二回 | 五行歌が詩歌にもたらしたもの | 第二十二回 | 石川啄木 人物 | 第五十回 | 万葉集はどのようにして出来たか |
| 第三回 | 詩歌呼吸論 | 第二十三回 | 石川啄木の意識と明治時代 | 第五十一回 | 間人連老 長歌+反歌の創始者らしい |
| 第四回 | 五行歌秀歌考 秀歌二十〜三十 | 第二十四回 | 石川啄木 | 第五十二回 | 柿本人麻呂、額田王 |
| 第五回 | 五行歌秀歌考 続き | 第二十五回 | 啄木の疑問に答えているのが五行歌 | 第五十三回 | 柿本人麻呂 天皇のイメージを創った男 |
| 第六回 | 草壁作品で見る五行歌の歴史 自歌自註 | 第二十六回 | 北原白秋の行分け歌 | 第五十四回 | 不遜で自立した身分の低い男 最初の文学の主人公となる |
| 第七回 | 個性と感性 人文科学に正解なし | 第二十七回 | その後の自由律口語短歌と五行歌 | 第五十五回 | 万葉集 山上憶良、山部赤人 |
| 第八回 | 世界詩歌の歴史 シェイクスピア | 第二十八回 | 自由律俳句 山頭火、放哉 自由律俳句に後継者が出ない理由 | 第五十六回 | 万葉集 大伴家持と古今集東歌 |
| 第九回 | バイロン、ハイネ | 第二十九回 | 重吉、暮鳥の短詩と中也 | 第五十七回 | 古代歌謡 |
| 第十回 | ゲーテ | 第三十回 | 江戸時代の短歌 橘曙覧 | 第五十八回 | 古代歌謡 |
| 第十一回 | 李白 | 第三十一回 | 松尾芭蕉 | 第五十九回 | 古代歌謡 |
| 第十二回 | 西洋詩がすたれた理由 現代詩の問題 | 第三十二回 | 松尾芭蕉とその門下 | 第六十回 | 古代歌謡 |
| 第十三回 | 日本―詩歌の国 政治経済の極と風雅の極が保たれた | 第三十三回 | 三冊子 つぶさに語ることが重要 | 第六十一回 | 古代歌謡 |
| 第十四回 | 明治文芸の意味 自我の目覚め | 第三十四回 | 蕪村 傲慢なりアリスト | 第六十二回 | 古代歌謡 |
| 第十五回 | 明治文芸 あさ香社から新派短歌始まる | 第三十五回 | 一茶 社会意識を持つ | 第六十三回 | 古代歌謡 |
| 第十六回 | 鉄幹、晶子、柴舟 | 第三十六回 | 本居宣長の古典研究 | 第六十四回 | 古代歌謡(漢字仮名習得) |
| 第十七回 | 与謝野晶子 | 第三十七回 | 連歌時代の意味 文芸の大衆化 | 第六十五回 | 思いの詩歌論 感性による詩歌との比較 |
| 第十八回 | 正岡子規 | 第三十八回 | 心敬 | 第六十六回 | 思いの詩歌 三つの根拠 |
| 第十九回 | 正岡子規の業績 | 第三十九回 | 京極為兼 十四世紀の短歌 超絶描写 | 第六十七回 | 学と思ひ(孔子) |
| 第二十回 | 口語散文 漱石、鴟外 | 第四十回 | 永福門院の中間色の風景 | 第六十八回 | 自分を広げるための体系的な題詠法 |
| | | 第四十一回 | 百人一首 平安・鎌倉の歌人 | 第六十九回 | 自己というテーマ |
| | | 第四十二回 | 百人一首 平安・鎌倉の歌人 | 第七十回 | 思いを深める方法 |
| | | 第四十三回 | 藤原定家 人と性格 | 第七十一回 | 感性を鋭く、豊かにする方法 |
| | | 第四十四回 | 西行 | 第七十二回 | 人間をよくする方法 |
| | | 第四十五回 | 新古今和歌集(幽玄体有心体鬼拉体など) | 第七十三回 | 歌会の方法 五行歌の歌会の特徴 |
| | | 第四十六回 | 古今和歌集 在原業平、小野小町 | 第七十四回 | 添削しないこと、他人の作品に触れないこと |
| | | 第四十七回 | 古今和歌集 紀貫之、紀友則、凡河内躬恒 | 第七十五回 | 書くこと、歴史として遺すこと |
| | | 第四十八回 | | 第七十六回 | まとめ |